

冬来春不遠

まほろば主人 宮下 周平

(仁木農場より)

「冬来春不遠

「冬来たりなば、春遠からじ」

店内に飾る垂れ幕用に、島田さんが撮った写真。
ベニシタン
紅紫檀の赤い実が覗く白雪を見ていても、何時も
のようにパツと言葉が浮かんで来ない。

「うんー、何かな……？」

しばらくして、この言葉が閃いた。

そう、「冬来たりなば、春遠からじ……」

原典の漢文は、何から来たのか、と調べると、
意外や意外、英詩であった。

If winter comes, can spring be far behind?

イギリスの詩人シェリーの「西風に寄せる歌」の
一節であった。

もし、漢文が原典で「冬来春不遠」ならば、「冬来
たりて春遠からず」の有り体の訳で済んだだろう。
英詩のせい、名訳者のせい、未然形と接続助詞
「ば」、打ち消し推量の助動詞「じ」で、何とも心地
よい響きを加えて古今の名句となった。

そういえば、仁木の隣、余市を舞台に繰り広げられた「マッサン」と竹鶴夫婦のリタ夫人はウイスキーの本場スコットランドの出身、ご主人も修業した土地。彼女があの大正時代見知らぬ異国日本の北の外れに來たことは、どれほどの苦節を経たことだろうか。「マッサン」のドラマにも、この「冬來たりなば



……」の章があつて、子供が生まれない、仕事があまくいかない、というあらずじの中、二人してこの一節を心に思い浮かべながら耐えたのかもしれない。あの撮影現場の余市川が、吾が畑の横を通っている。原生の藪を抜ける川面が何とも言えない昔ながらの風情を残している。

冬の辛い訪れが來たなら、春の日差しを待ち焦がれて耐える力を与えられる。こう思うのだ。きつとこの冬の中に、春も夏も秋もすべての季節がぎゅっちり詰まっている。春の優しさは、



夏の輝き、秋の渋さ、冬の厳しさがあつてこそ、一層光り出すのだ。そんな父母のような色とりどりの自然の移ろいに私たちは鍛えられ育てられている。

不思議な時

畑で仕事をする、毎日家内はテレビで当地の3時間おき、週間の天気予報を常にチェックして、仕事の段取りをする。実に予報もコロコロ変化する。当たり外れのある中、いかに天候が農作業に大切かを身を以て学ぶ。

殊に、雨の日は作業が出来ず、土もヌカって仕事ができない。雨の降らない早魃かんばつも困るが、降り過ぎにも泣かされる。更に雪ともなれば、作物は凍る、片付けは出来ないで、頭を抱える。

さすがに、十月末の一足早い初雪に、「ああ、ダメだ!」と絶望のため息を付いた。冬の片付けがまだ出来ていない。あれもしていない、これもしていない。みな雪の下になってしまつて、手が付けられなくなる。マルチも剥はがしていかない。畑も耕していかない。……山のようにある仕事。

「ああ、来年までお預けとは、情けないな」と落胆。

このビニールマルチを外すことは、中々コツがいり、100m剥がすのに工夫と時間がかかり、一日に何本も出来ない。後始末して心さっぱりして正月を迎えたいな。そんな忸怩たる思い。

しかし、数日後、太陽が射し込み雪も溶けた！



この時とばかり、息子と一緒に懸命に剥がした。切れ切れになるビニールに悪戦苦闘しながら、泥と雪の重たさに全身を使って引きずるしんどさは並でないが、それでも外し終わった時の喜びは代え難いものがあつた。自然の優しさが身に染み通るほどに感じられた。

「ああ、自然は待っていてくれている……」と。

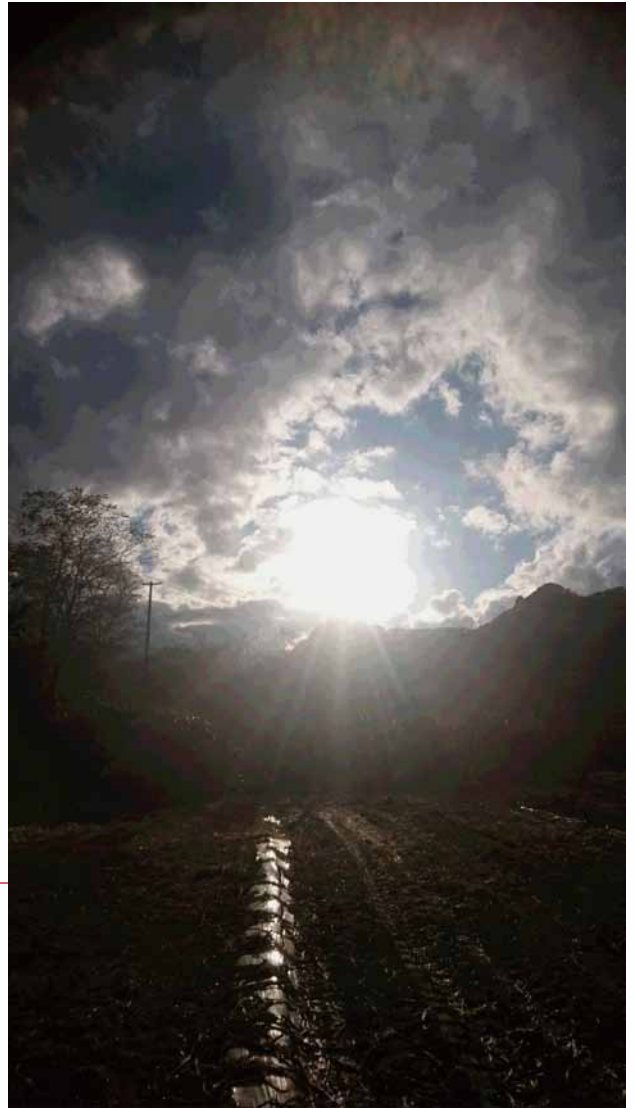
こんなこともあつた。

春一番、仁木に越して来た際、札幌から移植させるために持って来た沢山のニラの苗。トレーに10箱ほど。それを一番に植え直すべきなのに手が回らず、生命力の強いニラは後回しにされ、かわいそうに古い納屋の日陰に置かれたまま、一人ぼっちで何と半年も過ごした。雪は降っては消え、降っては消えして、

「ああ、かわいそうに、ニラさん、ごめんね、すまんね」

と言いながら、今年植えてあげられなかったことを悔いながら、心の中で謝っていた。

ところが数日後、カラッと天気になり、あれほどの雪も根雪にならず、最後の土壇場で、考えられない土起こしと植え付けが出来たのだ。土が無くても生き抜くニラの生命力に驚き、片やそう見せてくれる自然の配慮に、何か不思議な気持ちにさせられた。そんな痒き^{かゆ}に手が届くところにも、自然の愛は沁み渡り、満ち満ちている。



ときに、自然の災害が突発的にあって甚大な被害を齎すことがあっても、いつも自然は緩慢でゆっくりしている。何度も何度も揺り戻しがあり、引いては返し、引いては返す波のよう。都会生活では感じられなかった自然の多彩で繊細な心が、有難くって優しくって。何とも母親に揺り籠で揺らさされているかのよう。

一遍に秋は去らないし、一遍に冬は来ない。

ゆっくりゆっくり、私たちを呼び覚ましながら、気付かせながら、導いているかのよう。何時気付くか、何処で気付くか、と待っている先生や両親の気持ちのよう。それでいて、確実に毎日が微妙に変わって来て、変わらないようにして変わっ

て行く。何か、人生も同じように思う。何でも、待つ。ゆっくり待つ。信じて待つ……。

一日の作業が終わって家路につく時、何とも言えない満たされた充実感があつて、これを法悦と言うのだろうか。今まで中々感じられない心境、味わえなかった感受性だ。

農民の悲しみ

そんなとき、店に戻った。

すると、北竜の米農家・川本隆幸さんが来店されて、

「雪に埋もれて、大豆が刈れず、今年は諦めて下さい」

「ええー!!」

あのへうげ味噌も新醬も、川本さんの有機の鶴の子大豆無くしては出来ない、困ったことになった。刈ってから畑で「島立て」で干すことも出来ないという。

10月29日30日の初雪で、川本さんのまほろば用8・5反22俵の大豆が忽然として消えてしまったのだ。まほろばが創業した昭和58年来30年振りの早い雪で、すでに根雪になってしまった。例年は11月半ば過ぎだから、2週間早い。北竜町の

農家も30〜40町分取り残して泣いているという。暑寒^{しよかん}別岳^{べつだけ}の空つ風よ、何故に山間部だけに、かくも厳しいのか。

ああ、何処も農家は天候に泣かされているんだな、と同情した。片付けどころではないのだ。

あの9年振りの連続台風が、8月17日以来3ヶ月、7、9、10、11号と立て続けに続いた。十勝を中心に全道各地で、河川の氾濫と浸水、道路の寸断と橋の流失、交通網の麻痺で壊滅的な被害推計額は、過去最悪の2786億円、復旧見込額は1740億円で、昭和56年の水害を上回ったという。



雪を被った川本さんの大豆畑



剣淵町の水害



長年お付き合ひのある剣淵町の「いのちを育てる大地の会」の池田伊三男^{いさお}さん。その全町民は避難を余儀なくされ、全田畑は冠水。池田さんの玉葱と人参・南瓜畑は二度も水を被った。大豆の作柄は何とか三割減を保ったものの、黒豆は川本さんと同じで雪の下になった。味噌醤油の原材料がここでも消えたのだ。

この時、初めて川本さんの話を親身になって聞くことが出来た。自分が農家の真似事を始めて、漸く農家の人の気持ちが少しばかり分かるようになった。皆こんなで泣かされて来たんだな。残念だな、無念だな。

一年の食い扶持が一瞬にして消えてしまう自然の厳しさ。それを、0-1テストで、あれが悪い、これが良い、などと言って農家の人を帰したこともあり、切ない思いで戻っただろうな、といういろいろな場面を思い出していた。どんな農法であれ、作る手間のかかることは同じで、段取りから、育てや収穫、そして後始末。何一つとっても、一つの作物の陰には、百や千の手間がかかっているのだ。

どんな思いで、作物を送り出したことか……。

日本の行く末

そんな自然のしつぺ返しだが、その上にも厳しい農家の台所に追い討ちをかける。

さらに、農業の現実、若者の行く手を阻み、容易に受け入れてくれないのが今の日本だ。

大集約の大型企業化に国は拍車をかけて、個人の思惑が届かない。

今、日本には700を超える過疎市町村があり、全国のおよそ4割を占めている。人口では8%程度だが、驚くことに面積では5割を超えている、という。国土の半分に人が住んでいない、畑が荒れ放題なのだ。

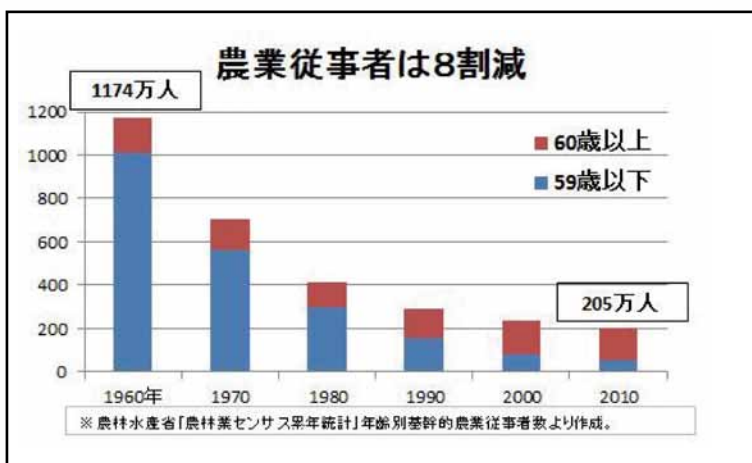
実際、ここ仁木町でも隣近所は超高齢化で、しかも後継者が居ない。軒並みそんな状況だ。そして農民の平均年齢が67歳だという。一歳若い私はここで

はヤングマンなのだ。

これは笑い事ではない。明らかに国の衰退滅亡を意味している。そして人口減少は急降下で現実となっている。今後10年で、日本の人口は700万人減り、15-64歳の生産年齢人口が700万人に落ち込み、65歳以上が半分の3500万人を突破するのだ。これが、世に言う『2025年問題』だ。団塊世代が75歳を超えて後期高齢者となり、何と国民の3人に一人以上が65歳以上、5人に一人が75歳以上という、右を見ても左を見てもお年寄りという嘗て人類が経験したことのない『超高齢社会』を迎える。すでに昨年から始まっているのだ。社会保障の破綻、際限のない増税、山積する難題、とんでもないこの事態を誰が解決するのか。

そして、何よりもその口に入れる物を誰が作るのか。50年前1174万人だった農業従事者が何と8割激減の205万人、さらに10年後には3割も減って、介護葬儀の従事者ばかりが激増する。現在820万人の認知症患者が、2025年には1.5倍の1200万人にも膨れ上がり、10人に一人が呆けている状況となる。

それでなくても、妻に「認知症でない？」と問われる昨今だ。自分では、聞いていないと断言するのだが、家内は何度も言ったという。そんな家々が



向こう三軒両隣。もはや日本自体が老境なのだ。

二宮尊徳翁は『農は立国の基』と、農本思想を力説した。何よりも食の自立なしに、国の自立、人の自立はない。国の政策は、何よりもかによりも、農・漁業の抜本的テコ入れが先決だ。若者に土地を提供して、国土を再びと開墾してもらわねば、国は成り立つて行かないだろう。もう、一極集中の都市繁栄が続く訳がない。



二宮尊徳像 (1787 ~ 1856)

これからは第一次産業の見直し、他に選択の余地がない。それは、世の初めから天下の大道だった。もはや、自然に頼るしか、帰るしか、日本の残された道、世界を開く道がない。

再びと自然の懷に

その昔 この広い 北海道は
私たちの 先祖の 自由の天地でありました。
天真爛漫な 稚児の様に、
美しい大自然に 抱擁されて
のんびりと楽しく生活していた彼等は
真に自然の寵児、
なんとという幸福な人だちであつたでしょう。

アイヌ神謡集より 知里幸恵 翻訳 (大正12年)



知里幸恵 (1903 ~ 1922)

中に身を置くと、その一言一言が肌の中から奥の心に染み入るように理解されてくるのだ。

以前は、極寒で衣食住に不自由で大変、と想像するしかなかった昔の暮らしぶりの、何と贅沢で豊かで楽しいものであつたか。その一言一節の中から輝き出ずる光で満ち溢れている。

その美しいという表現一言でも、都会では到底感じられない、深い広い微かな別世界は、単なる物質世界ではなかつたのだ。

もう、アイヌや縄文の人々にとっては、この世は天国、神々の住まう彼の樂園でもあつたのだ。



知里さんのこのアイヌ神謡集を読んでいると、その生き生きした描写が以前は観念的にしか映らなかつたものが、ここ田舎暮らしをして毎日自然の呼吸の

神は空を舞い、風に吹かれ、川辺を渡り、チセに何時も住まう。冬は寒くはなかった。暖かだったのだ。心の襜褕が寄り添う体温は何処よりも温かった。そんな大地に住まわせて貰うことの有難さ。毎日毎日、気付きの連続で、何が無くてもこの天地の間で人が生活することの喜びは代え難いものがあるのだ。

今年の連続台風で壊滅的な被害は、悲惨以外の何物でもなかった。でも、そんな剥き出しの自然の脅威ばかりがある訳ではない。

それで離散した農家もあるが、踏み止まった先祖も居てこそ今日があるのだろう。何よりも生き延びられる丈の収穫があつたればこそ、耐えられたのだ。

畑が根こそぎダメにされても、それでも先祖は、

「なにくそ！負けるものか！！」

と歯を食い縛りながら耐え抜いて来たから、今の北海道がある。それを支え続けたのは、矢張り自然の恵みと愛としか言いようがない。

そんな時、未開の十勝を開墾した依田勉三さんなどの不屈の闘志の偉大さと思う。

無から有を生む。原生林から作物を生み出す。大変な意思と労働力であつただろう。



依田勉三（1853～1925）



スーパームーンと炎

皆先輩たちは、私の歳頃に、功成り名を遂げて次代に継いだ。私は、今全くの未経験から、0の出発地点から耕作放棄地を再生する。出来るか出来ないか、志半ばで倒れるかもしれない。だが、この歳で、「やるしきやない！」と決意して、前に向かう。

幸い、経験深い家内に導かれながら、私より一日の長である息子に助けられながら、老体に鞭打つ我が身。

そして、まほろばの店長はじめ、みんなの陰乍らの協力に励まされ、何よりも目に見えないお客様の応援に後ろを押されながら、これからも一日一日を精一杯頑張ろうと思うのです。

来年もよろしくお願いいたします。
ありがとうございました。